



サイエンス アゴラ 2006

科学と社会をつなぐ広場をつくる

実 施 報 告

2006.11.25(土) 26(日) 27(月)

会場：国際研究交流大学村(東京・お台場)

主催：独立行政法人 科学技術振興機構

写真で振り返るサイエンスアゴラ 2006

サイエンスアゴラ2006は、2006年11月25日から27日まで、東京・お台場の国際研究交流大学村で開催されました。



初日午前中に行われたサイエンスライブショー「ユニバース」。研究者自らが客席に入って交流するスタイルのショーで100人以上の観客を喜ばせた。



サイエンスコミュニケーション活動を実践する若手によるセッション。各地で活動する学生同士が初めて顔を合わせる機会にもなった。



英国リチャード・ワイズマン博士によるマジックを交えたショー。多様な国籍の多くの参加者を集めた。



開会シンポジウムでのパネルディスカッション「科学と社会をつなぐ広場をつくる」の様子。



開会シンポジウムで挨拶する科学技術振興機構の沖村憲樹理事長。



「科学と社会」をタイトルに、開会シンポジウムで基調講演する国際研究交流大学村の吉川弘之村長（産業技術総合研究所理事長）。



11月25～26日の2日間にわたり200名の参加を得た「スペースダンス・イン・ザ・チューブ」のワークショップ。



理系人材のための就職イベント「Career Discovery」。講演、ディスカッション、個別ブース面接の3部からなるイベントにはリクルートスーツの参加者も。



東京国際交流館3階ホワイエには、各地での多彩な取組についてのポスター出展が行われた。

多様な団体・個人から多くの御協力を得て、実験ショーから、シンポジウム、ワークショップその他、非常に多彩なプログラムとなりました。



国立天文台講演会「冥王星が教えてくれた新しい太陽系の姿～惑星定義のすべてを語る～」には、早朝から多くの来場者が詰めかけた。



理科実験ショー「石っておもしろい」。実験ショーのコンテスト「科学の鉄人」を2連覇している境智洋氏によるショーは100人を超える観客を楽しませた。



米村でんじろうサイエンスプロダクションによるショーの様子。参加者を巻き込む大掛かりなショーは人気を集めていた。



科学読物研究会による「科学あそび」の様子。少人数での工作などのワークショップも多数行われた。



「科学コミュニケーター養成の多様性と共通性を考える」のワークショップ。カリキュラムのあり方について小グループに分かれてのディスカッションが行われた。



産総研サイエンススクエア臨海(展示コーナー)の特別公開とあわせて行われた持丸正明氏による講演と実演。



競争的研究資金のあり方を巡るシンポジウム。代表的なファンディング機関と大学の関係者が顔を揃えて白熱した議論が行われた。



「科学技術コミュニケーションにおける市民メディア・ポッドキャストの可能性」。立ち見まで出た会場は熱気に溢れていた。



科学リテラシーを巡るワークショップでは、国際基督教大学教授の北原和夫氏の講演も行われた。



小松左京氏はじめ多彩なメンバーによるシンポジウム「SFによる科学コミュニケーション『日本沈没』を題材に」。



総括シンポジウムでは、参加者全員が登壇するスピークアウトも行われた。



総括シンポジウムでの黒田玲子東京大学教授(総合科学技術会議議員)による基調講演「科学を育むー科学と社会のコミュニケーションのこれから」。

3日間、概ね晴天にも恵まれ1500人以上の方に御参加頂きました。

サイエンスアゴラ 2006 を開催して

皆さん、本日は足場の悪いところお越しいただきましてありがとうございます。このサイエンスアゴラ2006を企画するようになった経緯を少しお話しします。

第3期科学技術基本計画に向けて、サイエンスコミュニケーション、つまり科学者、技術者の専門のコミュニティと、国民およびいろいろな政府機関、学会、研究者とほかの人たち、いろいろな人たちの間をコミュニケーションの輪でつなごうという考え方が出てきました。そのルーツを考えてみますと、世界全体がそういう動きになってきたのはまだ比較的最近のことです。なぜそのような動きが出てきたのでしょうか。それまでは科学技術は専門家に任せておけばよかった。各国のポリシーメーカーの人たちに専門家が進言する形、国というお上りがサイエンスのポリシーを決めていました。ベルリンの壁崩壊以降、世界全体が民主主義という方向に向かって大きくかじを切ってきた。そうなりますと、国民は自分たちでサイエンスを考え、どちらの方向にかじを切っていくかを決める主権を持っているのだということに国民が目覚める、あるいは目覚めてもらわねばならない。そして、目覚めた国民が一国の科学技術政策を最終的には決めていくことになった。そうなりますと、国の科学技術振興という観点から考えましても、コミュニケーションを図ることは非常に重要であることを科学技術振興機構としても認識せざるをえない。

日本でも近年、サイエンスコミュニケーションの気運が高まってきました。このような折に、おのおのの個別の努力を1か所に集めて、コミュニケーションに携わる人たちの間でもコミュニケーションを図っていこうというのが端緒となる考え方でありました。それと同時に、私たちの野望としては、サイエンスコミュニケーションの輪を中心にして、さらにその周辺、科学技術者のコミュニティ、学会、学術会議、総合科学技術会議、さらにポリシーメーカー、そういういろいろな人たちをも巻き込んで、市民とともにディスカッションの輪を広げる場として成長して欲しいという願いをもっておりました。

この3日間のアクティビティをごらんになって、皆さんのご意見をこれから反映していただければいいなと考えております。ご参加いただきまして大変ありがとうございました。



平成18年11月27日 総括シンポジウムでの挨拶より

独立行政法人 科学技術振興機構
理事 北澤 宏一

P.S. 今後のサイエンスアゴラ。これから直ちに次の企画を考えていかねばなりません。まず、最初の課題は参加者の感想にもあるように、「アゴラは誰のものか」という問題に決断を下すことです。サイエンスコミュニケーターの横の連合会なのか、それとも、行政や研究者、そして個人、さらに家庭や子供をも含む縦のつながりを重視するのか？

仮にその両者をとるとすると、それは米国のAAAS(American Association for Advancement of Science)という巨大なNPOの大会に似ます。彼らはさらにTopical sessionをも付加的に開催し、時々トピックスを論じます。そうなると例えば横の企画と縦の企画は意図的に異なるポリシーが必要となりましょう。一方、本年度の予算はJSTの研究PRの経費のやり繰りからまかなくなりました。しかし、横の連合は通常の学会活動と学会の連合大会に相当しますから、いつまでも国費でやってもらうわけには行きません。連合協議会のようなものを設立してもらう必要がでてくるでしょう。縦の企画はコミュニケーターだけが負担すべき予算ではありませんから、これは国や寄付などにアピールすべき筋合いのものと考えます。

行き着くべき先に早く軟着陸を図るべきと考えますが、それまでの孵化の間はなんとか現在の延長の体制を守れるよう最低限の努力を関連者に払っていただくのがよいと思われます。皆様のご意見を事務局に集中し、次の企画がより充実したものとなるよう、より多くの皆さんが楽しめるようご協力されることを祈念します。

開催概要

イベント名称

サイエンスアゴラ2006 ～科学と社会をつなぐ広場をつくる～

開催メッセージ

サイエンスが社会と交流し対話する「広場(アゴラ)」となります。
サイエンスを担う多様な人々間の対話を促す「広場(アゴラ)」となります。
日本中のサイエンスコミュニケーター達が集い議論する「広場(アゴラ)」となります。

日程

平成18年11月25日(土)～27日(月)

会場

国際研究交流大学村
(日本科学未来館 東京都江東区青海2-41)
(東京国際交流館 東京都江東区青海2-79)
(産業技術総合研究所臨海副都心センター 東京都江東区青海2-41-6)

主催

独立行政法人 科学技術振興機構

共催

日本学術会議 科学と社会委員会 科学力増進分科会

後援

文部科学省、独立行政法人 産業技術総合研究所、自然科学研究機構 国立天文台、独立行政法人 国立科学博物館、財団法人 日本科学技術振興財団 科学技術館、ブリティッシュカウンシル、独立行政法人日本学術振興会、独立行政法人 海洋研究開発機構

協力

日本科学未来館、北海道大学科学技術コミュニケーター養成ユニット (CoSTEP)、脳を活かす研究会(「脳と社会」分科会)、HPスーパーサイエンスキッズ実行委員会、NPO法人 市民科学研究室、NPO法人 サイコムジャパン、NPO法人 海の自然史研究所、21世紀の科学教育を創造する会、天文学とプラネタリウム、日本科学技術ジャーナリスト会議、科学読物研究会、東京国際交流館、富山大学人間発達科学部、株式会社リバナス

全体企画

サイエンスアゴラ2006プログラム委員会(委員:縣秀彦(国立天文台)、上田昌文(NPO法人 市民科学研究室)、小林信一(筑波大学)、佐倉統(東京大学情報学環)、美馬のゆり(公立はこだて未来大学)、渡辺政隆(文部科学省科学技術政策研究所))

参加費

無料(一つのワークショップで、材料費の実費を頂いた。)

参加方法

各個別プログラムごとに、当日直接参加・事前登録の別あり。

サイエンスアゴラ事務局

責任者:長神風二

(運営)土屋学、吉田直史、菅原香、山口正直

(統括・総務)菅谷行宏、池田巖、榊康明、五十嵐奈巳

(企画)加藤牧菜

(広報)馬場利彰、長谷川和也、海野謙司、平田聡



会場の一つ、東京国際交流館の1F 正面風景



「細胞を創る?! 先端バイオの現場から」の風景



「かがくナビ・ワークショップ」の様子



「若手理系人のためのキャリアセミナー」での講演風景



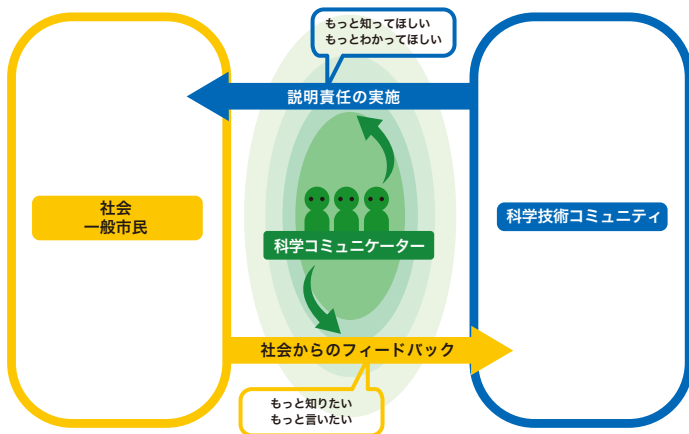
ワークショップ「科学の「わかりやすさ」の危うさ・大切さ—科学コミュニケーターによるオリジナリティの磨き方」

実施に至る背景・目的

背景

ここ数年、サイエンスコミュニケーションの重要性が広く認識されるようになってきました。国の政策においては、「社会・国民に支持され、成果を還元する科学技術」が第3期科学技術基本計画を貫く基本姿勢とされ、大学・研究機関、NPO等各種団体、企業などにおいても様々な取り組みが始められています。

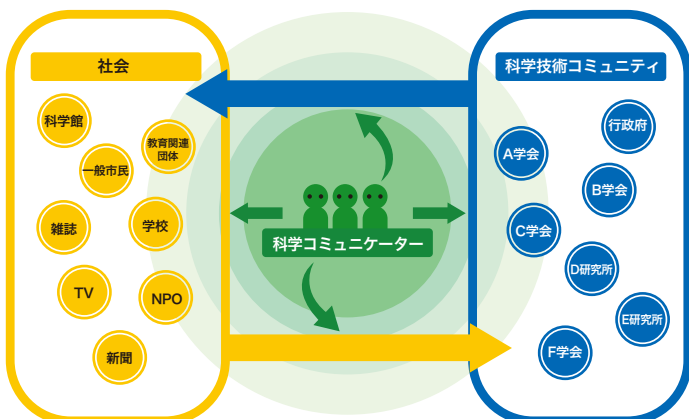
これら各地で様々な形で始まった取り組みを一過性のものに終わらせず、我が国の科学と社会の健全な発展に資するものにしていくため、活動全体の基盤整備が必要となってきています。



サイエンスコミュニケーション活動の基盤整備

サイエンスコミュニケーションを担う科学コミュニケーターは、科学技術コミュニティと一般社会をつなぐ役割を担う人として認識されています(参照:上図)。しかし、単純に語られがちな科学コミュニティ・一般社会も、決して一様ではありません(下図)。科学技術コミュニティや一般社会を形成する個別のコミュニティをつなぐ活動もまた、重要なサイエンスコミュニケーションと言えます。

実際、多くの科学コミュニケーターが、多様な活動に携わっています。これらの活動を担う人々・団体同士がお互いを知り、交流することによって、有機的なネットワークを形成していくことが、我が国全体のサイエンスコミュニケーション活動の基盤整備につながっていくと考えました。



日本中の科学コミュニケーター達が一堂に会し、お互いの活動と国全体の方向性について議論していく「場」を形成しよう、ということが、サイエンスアゴラ2006の実施の目的となりました。

とは言えサイエンスコミュニケーションは、科学コミュニケーター達のためのものではありません。

サイエンスコミュニケーション活動が広がりを持って発展していくために、多くの領域の方々の参加を得ること(下図参照)、また、サイエンスコミュニケーション活動そのものを結集して行うことによってより多くの認知を得ることを目指しました。

サイエンスアゴラ2006実施目的

サイエンスアゴラ2006の実施目的は下記3つに要約されます。

- ・サイエンスコミュニケーション活動を結集して一つで行うことで、社会に対して認知をはかり、人々が参加するきっかけとする
- ・研究機関・ファンディングエージェンシー・科学技術広報・科学館など、科学技術に関係をもつ様々なセクションが交流をはかることで、研究活動、コミュニケーション活動がより潤滑に行われるようにする
- ・日本全国のサイエンスコミュニケーターが結集する機会を作ることで、お互いの活動を共に知り合い、全体として活性化する機会とする



上記目的3つを書き換えたものが、開催メッセージとなりました。

サイエンスが社会と交流し対話する「アゴラ広場」となります。

サイエンスを担う多様な人々への対話を促す「アゴラ広場」となります。

日本中のサイエンスコミュニケーター達が集い議論する「アゴラ広場」となります。

上記の背景から分かる通り、サイエンスアゴラは、一時的なイベントの成功を目的としたものではありません。このイベントの実施が、より大きな動きにつながっていくことを目指しています。

データ報告

サイエンスアゴラ2006は、11月25日から27日の3日間で、83の団体の参加と、132名の登壇者、合計100^{*1}の出展を得て、1500名以上^{*2}の参加者を迎えました。

*1 ブース・ポスター出展も、1枚につき1の出展と数えています。
内訳は以下の通りです。

シンポジウム	7
実験・科学ショー	3
トークイベント・報告会・セミナー等	22
実験ワークショップ・体験会等	9
ブース・ポスター出展	59

<実験ワークショップには、ホワイエで行われたイベントも含んでいます。巻頭の概要に記載されていないものもあります。複数日にわたるイベントについては、1つと数えています。>

*2 3日間通して参加した方も1名とカウントするように計算すると、およそ1500-2000名程度の参加を得ています(受付等での集中管理はしていません)各個別のイベントへの参加人数を累計にすると、3781名に達します。

25日	1310名	(重複含む)
26日	2190名	(重複含む)
27日	281名	(重複含む)

個別イベントの参加人数

No.	プログラム名	25日	26日	27日	合計
A-1-1	サイエンスライブショー「ユニバース」	110			110
A-1-3	開会基調講演・開会シンポジウム「科学と社会をつなぐ広場をつくる」	180			180
A-2-3	“米村でんじろうサイエンスプロダクション”によるサイエンスショーとSqueak コンテスト		240		240
A-3-2	総括シンポジウム「広場からの発信-日本のサイエンスコミュニケーションの未来に向けて」			115	115
B-1-2	フォーラム「サイエンスカフェフォーラム～サイエンスカフェのこれから～」	90			90
B-1-3	セミナー「Dive into the Movie」	20			20
B-2-1	シンポジウム「科学者と研究の倫理」		67		67
B-2-2	ワークショップ「科学コミュニケーターのための共通知識を整理する」		40		40
B-2-4	講演会「科学技術リテラシーの構築と21世紀のデザイン」		60		60
B-3-1	科学技術広報とは何かーそれは、だれが、どこへ向かって、何を伝えるのか			50	50
C	新エンタテインメント体験「Dive into the Movie」	252	248	86	586
D-1-1~2	トークイベント「サイエンスフロントライン」	80			80
D-3-1	報告会「科学技術ジャーナリズムの現場をたずねて」			30	30
E-1-2	講演とショー リチャード・ワイズマン博士講演会「Mind Magic」	220			220
E-2-1	国立天文台講演会「冥王星が教えてくれた新しい太陽系の姿 ~惑星定義のすべてを語る~」		320		320
E-2-2	シンポジウム「競争的研究資金をより良く活用するために」		170		170
E-2-4	シンポジウム「SFによる科学コミュニケーション『日本沈没』を題材に」		150		150
F-1-1	広がる草の根サイエンスコミュニケーションNPO、ボランティア活動の現場から	15			15
F-2-1	理科実験ショー「石っておもしろい」		110		110
F-2-2	ワークショップ「Putting the 'WOW' Factor in Science Communication」		35		35
F-2-4	ワークショップ「研究のより良いウェブ情報発信に向けて」		30		30
G	サイエンスコミュニケーションのさまざまな試み(ワークショップのみ)	8	53		61
H-1-1	報告会「科学リテラシー育成の試みをつなぐ~学校、企業、NPOの「科学教室」の実践から」	15			15
H-2-1	B-Lab(ビーラボ)出前講習~新素粒子を探して下さい!~		15		15
H-2-4	ワークショップ「本音で語る研究倫理問題」		40		40
I-1-1	キャリアセミナー「バイオコミュニケーターの必要性和社会での活躍」	15			15
I-1-2	サイエンス・ブレインストーミング「脳科学と神経神話~科学と社会の健全な関係を探る~」	60			60
I-2-1	ワークショップ「海の科学教育プログラムMAREと子供達に伝えるための科学コミュニケーション」		20		20
I-2-3	「若手理系人のためのキャリアセミナー」		30		30
J-1-1	活動報告会 サイエンスコミュニケーション活動報告会「なぜ科学を伝えるの?」	25			25
J-1-2	海外の若手研究者から話を聞こう!「JSPS サイエンス・ダイアログ」	25			25
J-2-1	ワークショップ「参加型科学コミュニケーションの多様性」		20		20
J-2-2	ワークショップ「科学技術コミュニケーションにおける市民メディア・ポッドキャストの可能性」		80		80
J-2-4	ワークショップ「日本におけるサイエンスショップの可能性」		30		30
K-1-2	理系人材のための就職イベント「Career Discovery」	45			45
K-2-1	ワークショップ「サイエンスグッズ・ワークショップ」		80		80
K-2-2	ワークショップ「かがくナビ・ワークショップ」		67		67
K-2-4	『科学の「わかりやすさ」の危うさ・大切さー科学コミュニケーターによるオリジナリティの磨き方』		40		40
L-1-1	談話会「科学ジャーナリストに質問、疑問、異議!」	50			50
L-2-4	細胞を創る?! 先端バイオの現場から		45		45
M	スペースダンス・イン・ザ・チューブ	100	100		200
N	「産総研サイエンススクエア臨海(展示コーナー)特別公開」		100		100
合計		1310	2190	281	3781

各セッションからの報告にみるサイエンスアゴラ 2006

サイエンスアゴラ2006では、イベントのテーマや対象者、実施方式も多種多様なものが存在しました。各セッションオーガナイザーからの終了時点のコメントから、特徴的なものをいくつか紹介します。各セッションのオーガナイザーにとってサイエンスアゴラ2006への参加は、サイエンスコミュニケーションに興味を持つ人々が集まることによって、広報を効果的に行うことができたこと、同じような活動を行う者同士のノウハウの共有だけでなく、日本におけるサイエンスコミュニケーション活動の広がりを感じることができ、自ら行っている取組の意義を改めて考えるきっかけとなったことがわかります。

B-1-2 サイエンスカフェフォーラム サイエンスカフェのこれから

(前略)内容としては、サイエンスカフェのオーガナイザーだけでなく違う分野のカフェ(哲学カフェ)やカフェのオーナーをお呼びし、ちがった視点からの意見をぶつけて貰ったのは良かったと思う。今まで、オーガナイザーからの一方的な意見で終始する事が多かったが参加者側からの意見、会場の雰囲気作り、サイエンス以外のカフェとのコラボレーションなど具体的に工夫すべき内容が見えてきたと思う。(後略)



F-2-1 理科実験ショー「石っておもしろい」

境先生のような地道で良質な理科実験ショーをご紹介できたことは大変光栄かつ楽しいものでした。(中略)ねらいとした、地学のイメージの転換もできたことがアンケートから読み取れます。欲を言えば、もっとたくさんのお子さんたちや親子連れの方たちに参加していただけたらと思いました。(後略)



B-3-1 トークセッション 科学技術広報とは何か—それは、だれが、どこへ向かって、何を伝えるのか

研究機関等の広報担当者や、サイエンス・コミュニケーションを学び実践する若手の人々を対象にオーガナイズした。(中略)内容については、間接部門の広報担当者ではなかなか見えにくい、広義の科学技術広報を「俯瞰する」ことを目的とし、研究現場のインハウスジャーナリスト的な広報担当、専門誌記者、研究組織のリーダー/研究者という異なる立場から、それぞれの角度で科学技術広報を俯瞰してもらった。狙いどおり三角測量的に、サイエンス・コミュニケーションや研究活動とも地続きな、広義の科学技術広報を示すことができた。質疑応答も活発で、知的・実践的関心を刺激する内容になったと思う。(中略)次につなげていきたい。



B-2-1 シンポジウム「科学者と研究の倫理」

科学研究におけるデータ捏造などの不正行為を対象としながらも、研究をとりまく状況の変化や、科学研究のあり方をめぐる議論など、幅広い論点が提示され、シンポジウムをコーディネートした側としても、非常に楽しめました。参加者も、ゲストとしてご講演いただきたい方々も多く、エキサイティングでした。今後も研究倫理をめぐる議論を行う場を継続して開催していければと思います。今回はそのための非常にいいきっかけになったと思います。



D-1-1~2 サイエンス・フロントライン

早稲田大学・MAJESTyの学生が主体となるセッションとして初の試みとなった企画であった。様々な最先端科学の話題を、連続で紹介していく内容となったが、講演者の話はいずれもわかりやすく、また聴衆の反応も非常に良く、充実したセッションとなった。惜しむらくは聴衆の人数が少なかったことである。

H-2-4 ワークショップ 「本音で語る研究倫理問題」

(前略)「本音で語る」ということで、所属を名乗らなくてよい、ブログなどで発言者が分かるような記述はしない、などのルールを設けましたが、皆さん守っていただけようです。反省点としては、机の配置をもう少し対話形式にしたほうがよかったかなと思います。また、本音を引き出すために紙を配ってそれに書いてもらいました(中略)いずれにせよ、このワークショップを起点に、議論は続けていきたいと考えています。



I-1-2 サイエンスブレインストーミング 「脳科学と神経神話～科学と社会の健全な関係を探る」

科学者、教育者、ジャーナリスト、メディア研究者など、多様なスピーカーによる討論は、非常に盛り上がった。聴衆は、当初は研究者に偏るか危惧していたが、さまざまなバックグラウンドの方が来てくださり、アゴラの一環として行った効果が大きかったと思う。ポピュラー・サイエンスや科学啓蒙書の問題は、今後のアゴラでも重要なテーマのひとつと思う。



J-1-2 海外の若手研究者から話を聞こう！「JSPSサイエンス・ダイアログ」

本事業を開始して2年目。広報不足により思うように事業を拡大できず悩んでいたため、今回のサイエンスアゴラへの参加は、多くの方々に本事業を紹介できたという面において、とても価値のあることでした。また、セッションを企画することで、私自身も自ら行っている取組の意義を改めて感じることができました。(中略)今回のサイエンスアゴラでは、日本各地で様々な取組が行われていることを知り、その方々と交流を持つことができたという点においても貴重な機会となりました。来年度も、ぜひ参加させていただきたいと思えます。(後略)



K-1-2 理系人材のための就職イベント「Career Discovery」

事前申し込みの時点で40名の定員いっぱい。当日キャンセルが出たものの多くの方にご参加いただきました。また、内容・進行に関しても問題なく進み、参加者・企業双方の満足度も高く、成功といっていいいできであった。



L-1-1 科学ジャーナリストに質問・疑問・異議！

科学ジャーナリストとは？科学ジャーナリズムとは？科学報道のあり方は？をめぐりかなり、初の試みとしては予想以上に活発に議論できた。科学コミュニケーションが注目され、この分野に仕事を求めたい人が増えていることが分かった。しかし、ジャーナリスト、ジャーナリズムの基本に関する社会、文化的理解が不足していることも感じた。



M スペースダンス・イン・ザ・チューブ

チューブ初体験の人々に、大変興味を持ってもらえたと思う。2日間のトークショーも、活発な意見交換があり、サイエンス・コミュニケーションとして、ある程度実践できたのではないかと考えている。ここでの成果と新たな課題を、今後を生かして取り組んでいきたい。



来場者アンケート

3日間の開催中、来場アンケートを行いました。アンケートの項目は9項目、回収数は3日間合計で188枚でした。

アンケート全体を通じて

アンケートの結果から、参加者は、20代から40代が主流、女性が3割と、他の医師薬・理工系の学会やシンポジウムと比較して、多かったことがわかりました。また、開催の目的と通じる「科学と社会の関係を考えるきっかけを提供する」役割はほぼ達成でき、今後もこのような機会が望まれていることが明らかになりました。自由記述の回答には、改善すべきところ、開催周知の方法、参加対象を広げること、より掘り下げていくテーマなどがあり、次回開催に向けて参考にしていこうと考えています。

1. 回答者に関する情報

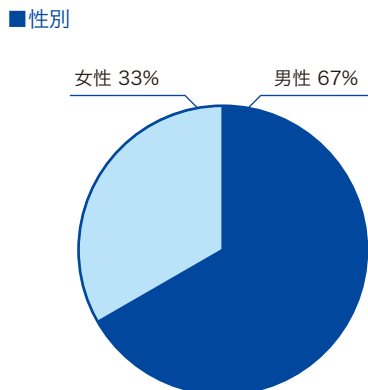
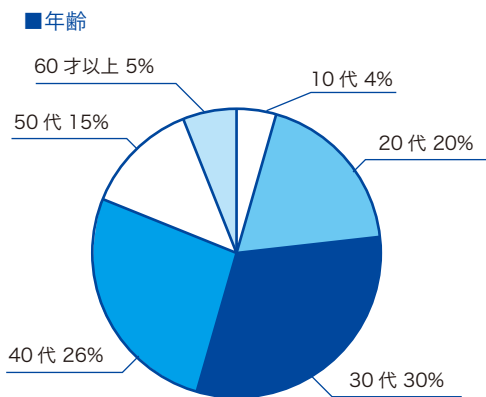
回答者の男女比は2:1で、年齢は、20代、30代、40代を合わせると76%になりました。

職業は、未記入が23%あったものの、会社員が26%、学生・院生が13%、研究者が9%、公務員・団体職員が10%、教員が6%、主婦が5%、このほか、高校生、自由業、無職などもありました。

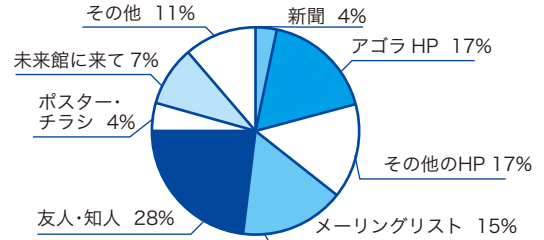
これらの結果からわかることは、20代から50代の現在活動中の層の参加が多いことです。

その中でも特に30代、40代の層の関心が高く、また無職の中には、リタイアしたと思われる人もあり、主婦やリタイア層の参加もあったことは、特筆すべきことと考えます。

認知経路については、多岐にわたっていますが、友人・知人からの口コミによるものが多く見られました。



■サイエンスアゴラをどこで知りましたか

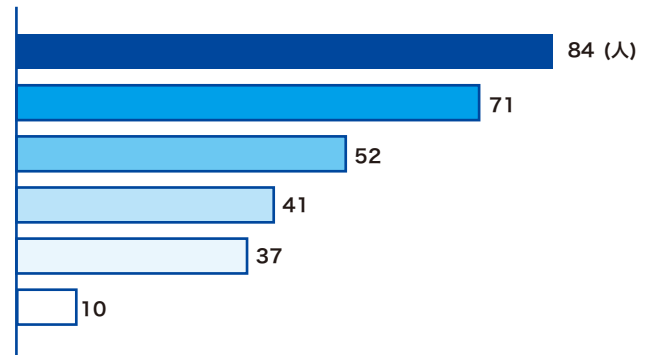


2. 参加の目的

参加目的は、5つの選択肢を複数回答可として行った結果、ほぼどれもがバランスよく選ばれました。

- 1) 新しい科学技術の内容について知る
- 2) 科学コミュニケーションの動向について知る
- 3) サイエンスアゴラに参加する人たちと交流する
- 4) 著名な人の話を聞く
- 5) 自分の科学コミュニケーションスキルを向上させる

■サイエンスアゴラに何を期待して参加しましたか(複数回答可)



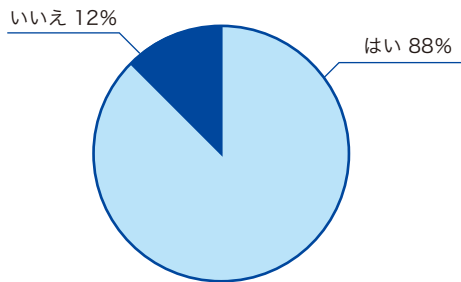
- 科学コミュニケーションの動向について知る
- 新しい科学技術の内容について知る
- 著名な人の話を聞く
- 自分の科学コミュニケーションスキルを向上させる
- サイエンスアゴラに参加する人たちと交流する
- その他

3. 「サイエンスアゴラに参加して新しい発見がありましたか？」という設問に、「はい」と答えた人が88%に上りました。

●「はい」の回答の具体的内容

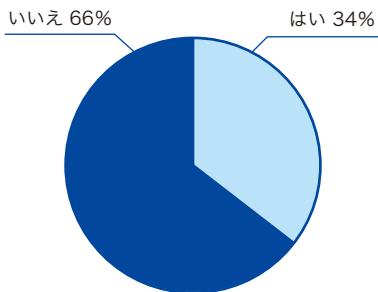
- ・サイエンスコミュニケーションとしていろいろな試みのあること
- ・科学コミュニケーションと関わっている人が意外と多いと感じました。
- ・他分野の方の問題意識
- ・メディア等の報道では見えない部分が現場の声により知ることが出来た

■サイエンスアゴラに参加して新しい発見はありましたか



4. 参加して、科学技術や研究者に対するイメージは変わったかについては、「はい」が34%でした。

■サイエンスアゴラに参加して、科学技術や研究者に対するイメージは変わりましたか



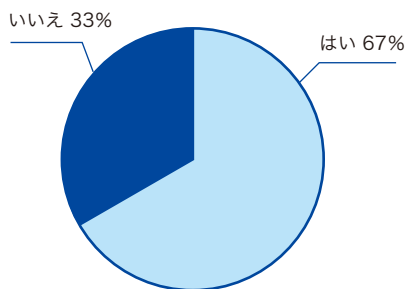
参加したのは、サイエンスアゴラ2006に参加しようと自ら考えていらした方々であり、当日急遽参加した方も主に日本科学未来館の来館者であり、科学技術や研究者に対して、実態に即したイメージを持っていた、ということが考えられます。

●変化した例

難しい、かたい、社会との関わりがうすい > ひょうきんな人だったかたそう > 市民やマスコミに伝えようとしている、意外と普通もったかたいイメージがあった > おもしろかった

5. 科学と社会の関係について考えるきっかけとなったかについては、「はい」は67%でした。

■アゴラは、科学と社会の関係について考えるきっかけとなりましたか



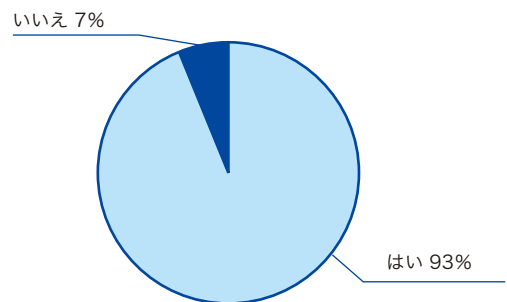
●どのような関係について考えましたか？

・擬似科学と科学との違い、社会との高尚な関係
 ・一般の人が科学や科学者に対して何を期待しているのかを一般の人が発言すべき。科学者は聞くべきという話

- ・科学技術コミュニケーションによるかけはしになるということ
 →科学技術コミュニケーションが大切であるということ
- ・科学も社会も多くの需要からなりたっているということ
- ・もっと興味がある人が増えれば、分野が活発になり、生活や文化が豊かになると思う。
- ・意外な企業が活躍しているのが面白かった
- ・科学に興味を持つ市民が気楽にしかし、専門的な話を聞ける事が大事な事と思いました。
- ・関係作りに色々な手法があること、そしてそれらは色々な形で既に実践されていること
- ・伝える方(科学)と伝えられる方(社会)の温度差をどんな方法でうめていくか
- ・科学だけではカベが高く、どのように地域に根ざしていくか？考えさせられた

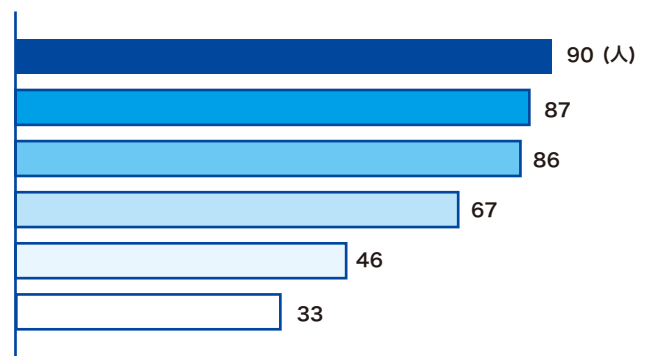
6. 今後もこのようなイベントがあれば参加したいかについては、「はい」は93%でした。

■今後もこのようなイベントがあれば参加したいですか



参加したいイベントについて6つの選択肢を複数回答可として行った結果、ほぼどれもがバランスよく選ばれました。

■どのようなイベントに興味がありますか(複数回答可)

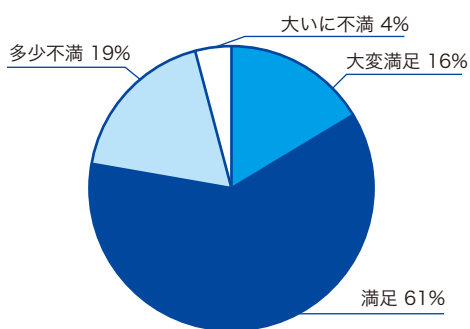


- サイエンスコミュニケーションの現場に携わる人向け
- 最先端の科学を知ることができるイベント
- 科学者・研究者と直接交流ができるイベント
- 理科教育に興味がある人向け
- 家族連れ向け
- 大学生・大学院生・若手研究者向け

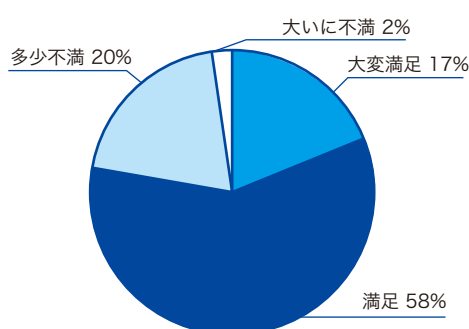
来場者アンケート

7. 開催時期、日数、会場などについても質問した。これらのほとんどの項目について、「大いに満足」と「満足」を合わせ、70%前後でした。このほか参加スタイル(前日参加か、一部参加か)などについても回答を得たので、次回の日程設定等に参考にしていこうと考えています。

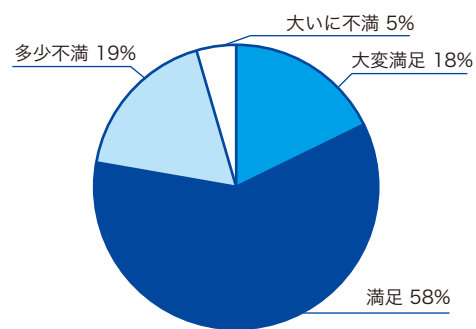
■開催時期について



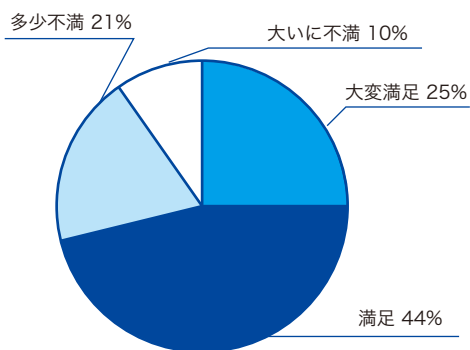
■開催日数について



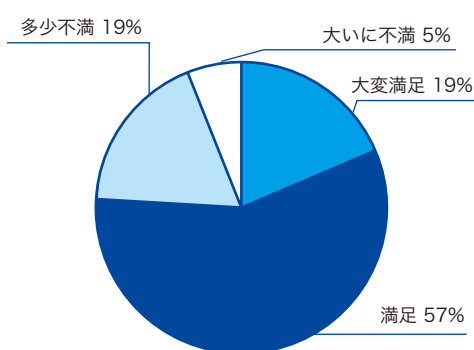
■プログラム数について



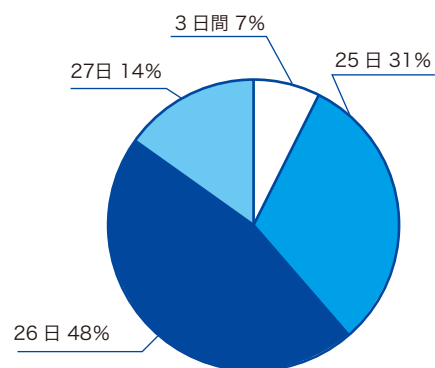
■会場について



■全体的な内容について



■来場状況



■あなたの参加スタイルはどれに近いですか(複数回答)

興味のあるプログラムのある日のみ参加	99
ワークショップ型のものに参加	19
会場に来てからプログラムを見て参加	15
会場に来てから誘われ参加	5



ワークショップ「参加型科学コミュニケーションの多様性」

8. 自由記述により、多くの御意見を頂きました。御参加頂いた方それぞれが様々な視点から御意見を持っていることがわかります。特に全体プログラムの設計に綿密なデザインが必要なことなどが浮かびあがってきました。次回に活かしていきたいと思います。

- 大変楽しめ、かつ勉強になりました。ありがとうございました。このような機会があったことがとても嬉しいです。(20代女性・東京・大学生)
- 続けていきましょう(20代男性・東京・研究員)
- 時間帯が重なりやすいのは少し残念でした(20代女性・東京・会社員)
- 科学技術は経済と切り離せない。 理科学研究は経済状況による。社会市民の役に立つようにすべき。また研究者、技術者の地位を上げるべき。(50代男性・茨城・団体職員)
- シンポジウムとシンポジウムの間の時間をあけてほしい。特に未来館と交流館の間の移動に時間がかかる(30代男性・東京・大学教員)
- 研究者の話をたくさん聞けるとよい(30代女性・岐阜・主婦)
- 開会式のパネルに研究者がいないのは残念。かつて日本のSTSが「語り」に終わったようにあくまで主役は科学。科学コミュニケーターが主役のイベントにはいけない!!本物の科学者はやはり迫力あり。よい面は若い人が多かった。女性が多かった。その理由を把握してつづけるべき。(40代男性・東京・公務員)
- ニュースリリースでしか見ていないのでもっと告知を徹底した方が良いかと思います。(20代女性・東京・出版関係)
- 「科学」の広場ではなく「科学コミュニケーター」のアゴラということでもっとコミュニケーターを志す人々が交流できるような会、ひろば、祭的なイベントになっていけばよいと思います。こうやってイスにすわって聞いていてもとなりにすわっている人が、何に興味を持って、このアゴラに来ているのかわからないのはコミュニケーションできていないところ致命的な状態になっているのではないのでしょうか。このアゴラのことについては多く知りませんが、せっかくあつまったコミュニケーターがコミュニケーションできる場になってほしいです。そういう場がもうあればすまません(懇親会など)(20代男性・神奈川・大学院生)
- 仕方ないが、同時に開催される興味のあるセミナー、ワークショップが重なり内容についてのハンドアウトなどもいただけない。HPで各催しの報告を期待している (50代女性・千葉・主婦)
- せっかくお台場なのに、「デート向け」という発想はないのですか…？(20代男性・神奈川・大学院生)
- 3連休の日や夏休みシーズンに開催してほしかった(40代男性・東京・会社員)
- 会場(アクセス)が遠いので関心があっても二の足をふむ人が多い。→参加した人が来たくてもこれなかった人にハンドアウトなどをもらって伝えている状況→HPで全参加団体の短くてよいから発表要旨とその団体のHPへのリンクを付けて示してほしい(イベントが終了してからでかまいません) (40代女性・埼玉・大学院生)
- 名前がわるい、日本人だれにでもわかる名前にしてほしい、科学広場のほうがよほど良い。AAASのようなものとなっていくと最も良いが…まだ力不足。コミュニケーションはいい切り口。科学未来館では毎週のように科学ショーを開いてほしい 学校の長期休暇に合わせてサイエンスショー週間を開くような努力も必要。科学者同士が話し合える場があるとよい。知り合える。(50代男性・千葉・研究者)
- プログラムがとても見にくくわかりにくい (40代女性・東京)
- 受付の対応がとてもよく感動した。(30代男性・山梨・公務員)
- まだ第一回という事で、各セッションの質には大きなバラツキがある様に思いましたが、何よりもコミュニケーター同士が出合えるのが重要と思うので、今後も続けてほしい(30代男性)
- 参加したいイベントが重なってしまいました。専門分野ごとにできるだけ、時間をわけてほしかったです。(40代・東京・映像制作)
- 最初のチラシで提示されていたものより、スケジュールが変わっていて(増えていて)来てからとまどった。部屋に入り易くて(雰囲気)安心した。場所が来にくかった。もう少し分野の幅があればもっと嬉しかった。(20代女性・高知・大学生)
- 参加者に名札を着用させてほしい。(30代・愛知・広報)
- このアンケートは3日間参加してやっと回答ができる内容かと。1、2コ参加しただけではおこがましくて回答しづらいです、スケジュールが非常に読みづらい。よくコミュニケーションとか言えますね、と。会場もわかりづらい。(20代女性・東京・会社員)
- ワークショップ型のプログラムが多く、議論が深まらないように思う。(20代女性・東京)
- この時期、いろんな講演会が重なる時期なので困った。しかたないですが、高校部活の試合と重なり、高校は定期試験の時期なので教員は問題づくりで忙しく、生徒にはすすみにくいところです。(50代男性・神奈川・高校教員)
- 今日(27日)に知ったので、残念ながら、25、26日は見られなかった。来年も「サイエンスアゴラ」開催して下さい。(50代男性・東京・会社員)
- 直接参加できなくても、podcastを使って内容をもっと多くの人にアクセス可能にしてほしい。(20代女性・東京・国際理科教育)
- 次回、優生学の歴史についてのセッションをしてほしい。(40代・研究職)
- 参加できなかった日のワークショップの内容方法を知りたいです。(30代女性・神奈川)
- もっと早くから知っていれば良かったです。(20代女性・千葉・販売)
- つめこみすぎ。誰のための、何のための場なのかわからない。(20代女性・学生)

メディアに取り上げられたサイエンスアゴラ

サイエンスアゴラ2006は、初めての試みだったこともあり、多くのメディアに取り上げられました。科学面を中心に多くの一般紙に事前告知が掲載され、また幾つかのテレビ取材も受けました。

開催前

プリント

掲載日	媒体名	媒体社名
9月28日	日刊工業新聞	日刊工業新聞社
9月29日	科学新聞	科学新聞社
10月7日	日経産業新聞	日本経済新聞社
10月10日	子供の科学11月号	誠文堂新光社
10月18日	初等理科教育11月号	農山漁村文化協会
10月18日	現代化学11月号	東京化学同人
10月20日	天文月報11月号	社団法人 日本天文学会
10月22日	バイオニクス11月号	(株)オーム社
10月24日	週刊エコノミスト	毎日新聞社出版局
10月25日	パリティ11月号	丸善(株)出版事業部
10月25日	日経サイエンス12月号	日本経済新聞社出版局
10月26日	理科教室11月号	(株)星の環会
10月26日	Newton12月号	ニュートンプレス
10月27日	Metropolis	CrissCrossKK
10月27日	シーサイドストーリー11月号	産経新聞社
10月31日	日本経済新聞(首都圏)	日本経済新聞東京本社
11月1日	社会教育11月号	(財)全日本社会教育連合会
11月6日	世界日報	世界日報社
11月7日	朝日小学生新聞	朝日学生新聞社
11月8日	毎日新聞	毎日新聞社
11月8日	毎日新聞(大阪夕刊)	毎日新聞社
11月8日	毎日新聞(北九州夕刊)	毎日新聞社
11月10日	子供の科学12月号	誠文堂新光社
11月12日	数学セミナー12月号	日本評論社
11月14日	読売新聞シティライフ(東京夕刊)	読売新聞社
11月14日	朝日新聞(夕刊)	朝日新聞社
11月18日	読売新聞(新潟)(群馬)	読売新聞社
11月20日	読売新聞(東京、札幌夕刊)	読売新聞社
11月20日	読売新聞(大阪夕刊)	読売新聞社
11月23日	アーバン	(株)アーバン企画
11月23日	R25	リクルート
11月23日	東京新聞	中日新聞社
11月24日	シーサイドストーリー12月号	産経新聞社
11月24日	月刊アスキー	アスキー

ウェブ

掲載日	媒体名	URL
10月13日	学びの場.com	http://www.manabinoba.com/
10月17日	kijiji	http://www.kijiji.co.jp/
10月20日	event-eye	http://www.event-eye.com/
10月20日	社会科見学とイベント情報ナビ	http://1go2go.or.tv/
10月27日	Metropolis	http://metropolis.co.jp/
10月27日	ジャパンデザインネット	http://event.japandesign.ne.jp/news/8470061018/
10月31日	JRおでかけネット	http://event.jr-odekake.net/event/37088.html
10月31日	Yahoo!地域情報	http://local.yahoo.co.jp/static/event/a113/37088.html
11月8日	MSNニュース(毎日新聞)	http://www.mainichi-msn.co.jp/science/kagaku/news/20061108ddm016040048000c.html
11月15日	星ナビ(WEB内「パオナビ」)	http://www.astroarts.co.jp/hoshinavi/pao/index-j.shtml
11月16日	東京イベントナビ	http://eventnavi.jp/
11月16日-27日	えるこみ	http://www.lcomi.ne.jp/
11月17日	ミュゼ(WEB)	http://www.musee-um.co.jp/
11月17日	江東区ウォーカー	http://www.walkerplus.com/koto/
11月17日	AstroArts	http://www.astroarts.co.jp/news/2006/11/17science_agora/index-j.shtml
11月21日	MSN 理系白書ブログ	http://rikei.spaces.live.com/
11月25日	MSN 理系白書ブログ	http://rikei.spaces.live.com/

TV

OA日	媒体名	媒体社名	備考
11月5日-11日	イチオシ	東京ベイネットワーク(株)	夢チャンネル(江東ケーブルテレビ) 事前告知のみ(1日5回)

開催後

プリント

掲載日	媒体名	媒体社名
11月27日(月)	朝日新聞(東京)	朝日新聞社
12月8日(金)	科学新聞	科学新聞社

ラジオ

放送日	番組名	放送局
11月25日(土)	関こうきの明日があるさ	レインボータウンエフエム放送

TV

放送日	番組名	放送局
11月26日(日)	FNNスーパーニュースWEEKEND	フジテレビ
1月20日(土)	サイエンスゼロ	NHK

*12/9以降のプリント、開催後のウェブについては割愛。

日本経済新聞 2006.10.31

東京で科学技術や数学を楽しく学べるスポット

スポット名	場所	特色
リスabee	江東区有明	松下電器産業が運営。入り口で携帯端末を借りて、ゲーム感覚で館内巡りができる
日本科学未来館	江東区青島	最先端の科学技術を分かりやすく紹介する解説員を配置。学校や塾の科学館との連携にも力を入れている
科学技術館	千代田区北の丸公園	インターネットで割引券が入手できるほか、年数回におすすめの見学コースを紹介
多摩六都科学校	西東京市芝久保町	世界でも有数の大型プラネタリウムが人気
アホバ・ロボット運動会(11月3-5日)	秋葉原UD Xビル2階	ロボットの操作や競技会、グッズ販売などが盛りだくさん
サイエンスアゴラ2006(11月25-27日)	日本科学未来館など	小説「日本沈没」から研究費の獲得方法まで科学と社会のつながりに関する総合イベント

科学・技術を楽しむ学ぶ

施設で「理科」快感

「理科や数学は難しい」「学校生活には関係ない」と考える子供が増え、技術大国・日本の将来を危ぶむ声もあがっている。こうした傾向を反映してか、東京都内では科学技術や数学の不思議を楽しく学べる企業や施設やイベントなどが増えている。子供の理解を深め、気軽に利用してみたいところだ。

松下電器産業は八月、江東の有明のショールームに、1と0の数字でしるす原理を学ぶ施設を開いた。1より大きい数が大きく変化し、余数から2・3・4・5・6・7・8・9の数字でしるす原理を学ぶ。また、おもしろい日本科学未来館(江東区)が打つ「数感ホッケー」もある。館内は宇宙飛行士の川口博之さん、企業家やイベム感覚で理科の原理や現象を体験できる。ゲーム感覚で理科の原理や現象を体験できる。ゲーム感覚で理科の原理や現象を体験できる。

先週土曜日に開かれたショーでは、物産ガスの今年新刊した「がらす」をテーマにした、分鏡別の特集展覧会を開催。本展覧会には「多摩六都科学校」(西東京市)がある。館内は「アホバ・ロボット運動会」(11月3-5日)と「サイエンスアゴラ2006」(11月25-27日)など、各施設ならではのイベントや大人気な展示もあがっている。知能の習得など科学・技術の秋を堪能できる施設は続々とあがっている。

東京シーサイドストーリー 2006.10.27

サイエンスアゴラ2006開催

11月25日(土)～27日(日)

東京都江東区有明の日本科学未来館、東京国際交流センターでサイエンスコミュニケーションのイベントを開催予定です。約15の会場で、国や海外の科学者、個人が参加し、シンポジウム、講演会、ワークショップから実験体験までさまざまな催しが行われます。

会場：2006年11月25日(土)～27日(日)

会場：東京国際交流センター(日本科学未来館・江東区青島2-4-1) (東京国際交流センター・江東区青島2-7-1)

参加費：無料 (一部企画で材料費等の費用がかかる場合があります)

主催：独立行政法人科学技術振興機構

サイエンスアゴラ2006ホームページ <http://www.acic.or.jp/top.html>

問い合わせ：03-5501-2351 (独立行政法人科学技術振興機構)



週刊エコノミスト 2006.10.24

伝言板

◇「サイエンスアゴラ2006」

科学技術振興機構(JST)は11月25-27日、東京・江東区の国際研究交流大学村で、科学技術と社会のよりよい関係を考えるサイエンスコミュニケーションの大規模イベントを開催する。

アゴラはギリシャ語で「広場」の意味で、およそ10の会場では、サイエンスショーをはじめ、シンポジウム、ワークショップ、映像体験などが盛りだくさんのイベントが開かれる。

身近な物に隠れている科学の面白さを伝える「チャーター・西村のおもしろサイエンスショー」(来村でんじろうサイエンスプログラム)は11月26日15時～16時30分、早稲田大学主催によるワークショップ「アホバ」(Aho-ba into the future)では、「来場者が映画のキヤスとして出演し、その演技を観る」という新しいエンターテインメントの形を実現する(11月26日・27日)。また、サイエンス・アプレインストーリーミング「脳科学と神経言語」では、発達する脳科学の今と、脳科学と社会との健全な関係を、研究者や教育、行政など幅広い分野の参加者たちが語りあう。イベントには当日、直接参加型のものや事前登録の必要なものがあり、詳細はホームページ参照。

■日時 11月25日(土)～27日(日)

■場所 国際研究交流大学村(日本科学未来館・東京都江東区青島2-4-1、東京国際交流センター・東京都江東区青島2-7-1)

■参加費 無料(一部企画で材料費などの実費徴収あり)

■問い合わせ 科学技術広域財団

TEL 03-5501-2351

URL <http://www.acic.or.jp/>

科学コミュニケーター集結

科学技術振興機構は25～27日の3日間、東京都江東区青海の国際研究交流大学村で「サイエンスアゴラ2006～科学と社会をつなぐ広場をつくる」を開く。科学の普及などに取り組む研究者や教師、科学館の職員ら全国の「科学コミュニケーター」が集まる初の催しで、

参加者を募集している。P224-63

期間中、映画化されたSF小説「日本沈没」をテーマに、原作者の小松左京氏と地震学の研究者が語り合うシンポジウム（26日午後5時、日本学術会議主催）や、ロボットや宇宙の最前線の研究者が成果を語る「サイエンス・フロントライン」（25日午前10時半、早稲田大科学技術ジャーナリスト養成講座主催）など、科学をテーマにした講演会などが行われる。いずれも入場は無料。

また、科学実験ショーや研究者の倫理問題を考えるセミナー、理系人材の就職支援イベントなど、さまざまな催しがある。詳細は <http://www.scienceagora.jp>。

「理系白書」へのご意見は rikei@mbx.mainichi.co.jp。その他の記事へのご意見、ご質問は tky.science@mbx.mainichi.co.jp へ。ファクスは [いずれも03・3215・3123](tel:03-3215-3123)。

MY AREA INFORMATION & TOPICS

イベント：イベント

科学技術広場開演

サイエンスコミュニケーションイベント、科学に楽しむ「サイエンスアゴラ2006」

お台場の日本科学未来館、東京国際交流館など、「国際研究交流大学村」の10の会場で、シンポジウムやワークショップなどが行われます。子どもにもわかりやすく、興味を引くサイエンスショーもあるので、親子で出かけてみて、事前登録が必要なプログラムもあるので、まずはホームページのチェックを。入場無料（イベントは一部実費のものあり）



□会期：11/25（土）～27（月）10:00～18:00（最終日は17:00まで）
□問い合わせ：電話＝03-5501-2351
□URL： <http://www.scienceagora.jp/top.html>

よりよい情報をお届けするために、みなさんの意見をお聞かせ下さい
この情報は気に入りましたか？

comi
LINE

CLOSE 目

科学グッズ 開発を体験

研究者ら異分野交流

ヒトの腸内菌をキャラクターにした学習おもちゃ、天候図が内側に描かれた傘……。知的好奇心をくすぐるサイエンスグッズの斬新開発を体験するワークショップが26日、お台場であった。科学技術の交流イベント「サイエンスアゴラ2006」の一環で天文学を身近にしようと活動する大学院生らが企画した。研究分野の異なる学生や研究者ら約30人が参加、生物や物理、宇宙など専門分野ごとに8班に分かれ、グッズの企画を出し合った。会場の投票で1位に選ばれた企画は「シークレットシート」。携帯電話の待ち受け画面で、栽培する植物の成長を、光センサーのついた携帯ストラップで、光合成させる。

参加した京都大学大学院生の森田華子さんは「普段は交流のない分野同士で意見を一つにまとめるのはエキサイティングでした」と話した。サイエンスアゴラは、国際研究交流大学村の3会場で27日まで。無料。詳しくは <http://www.scienceagora.jp/>。

11月25日(土)

会場：日本科学未来館

A-1-1 サイエンスライブショー「ユニバース」

11:00-12:00 主催：ちもんず、財団法人 日本科学技術振興財団 科学技術館
登壇者：半田利弘(東京大学)



サイエンスライブショー「ユニバース」では、最新の宇宙像を正確に再現したコンピュータシミュレーションとともに、第一線で活躍中の研究者が案内役となって天文学をはじめとする最新の科学の話題を解説します。ショーの進行は案内役と参加者の皆さんの対話によってさまざまに変わります。あなたも宇宙旅行気分です科学の面白さを味わってみませんか。

A-1-3 開会基調講演・開会シンポジウム「科学と社会をつなぐ広場をつくる」

15:00-18:00 主催：サイエンスアゴラ2006プログラム委員会



基調講演：吉川弘之(国際研究交流大学村長・産業技術総合研究所理事長)

シンポジウム登壇者：上田昌文(市民科学研究室)、高橋真理子(朝日新聞)、美馬のゆり(はこだて未来大学)、渡辺政隆(科学技術政策研究所)

科学者や技術者が社会との対話を深める場や活動の必要性が世界的に認識されている。日本の未来のために、全国的な、社会的な動きへとつなげていくための第一歩が、サイエンスアゴラである。本セッションでは、開催趣旨について、開催に至った経緯や企画者・参加者の思い、効果的な参加の仕方などを、シンポジウムを通して紹介する。

B-1-2 「サイエンスカフェフォーラム～サイエンスカフェのこれから～」

13:00-15:00 10:00-11:30 ポスターセッション(G会場) 13:00-15:00 フォーラム



主催：独立行政法人 科学技術振興機構

登壇者：曾根秀昭(東北大学)、中村征樹(科学技術政策研究所)、平松克仁(サロンド富山房フォリオ)、池田純子(武田計測先端知財団)、本間直樹(カフェフィロ)、平松正顕(天文学とプラネタリウム)、小林正樹(井戸端サイエンス工房)、櫻井英雄(日本科学未来館)

一口にサイエンスカフェといっても、実に多様な形で実施されており、日本にあった運営方法についてまだまだ模索中です。多様に行われている各地の取り組みについて情報交換を行い、サイエンスカフェを今後いかにわが国に根付かせるかについて、様々な立場からの意見を求め検討を行います。

B-1-3 セミナー「Dive into the movie」

15:30-17:00 主催：早稲田大学



登壇者：森島繁生(早稲田大学)ほか

25日～27日の3日間、会議室1で実施しているイベントの技術セミナーです。全く新しいエンタテインメント構築に向けて、①映像生成技術に関する研究、②配役モデリング及び配役中心映像処理技術に関する研究、③音声・音響処理技術に関する研究、の3項目で研究を進めています。それぞれの研究代表者より、技術解説をわかりやすく行います。

C

新エンタテインメント体験

10:00-17:00 「Dive into the movie～新しいエンタテインメントへのアプローチ～」



主催：早稲田大学

「来場者自らが映画のキャストとして出演し、その演技を観る」という今までに無かった全く新しいエンタテインメントの形を実現します。Future Cast Systemは、それを可能にしたシステムで、この技術は、2005年「愛・地球博」で実装され、163万人が体感しました。この新しいエンタテインメントの息吹を感じ取ってください。

D-1-1 トークイベント「サイエンスフロントライン」

主催：早稲田大学科学技術ジャーナリスト養成プログラム(MAJESTy)、サイエンスアゴラ2006プログラム委員会

D-1-1 10:30-12:25 登壇者：岩田隆浩「月面探査の最前線」セレーネ計画とその先へ 小林宏「人を動かし、生かす技術」人間支援機械システムの開発

D-1-2 13:00-14:55 登壇者：平尾一郎「DNA開発の時代-ATGCに新しい文字を加える」 根本香絵「量子の時代がやってくる」量子情報科学の現在



急速に進展する科学の研究。今年1年の成果を振り返るのもままなりません。このセッションは、若手科学コミュニケーターがコーディネーターとなって、最新の科学研究の話題を、1時間程度のセミナー形式で連続的に紹介するものです。多くの話題から、近年の科学の進展を広い視野で俯瞰できるイベントになるでしょう。

L-1-1 談論会「科学ジャーナリストに質問、疑問、異議!」

11:00-13:00



登壇者：小出五郎(JASTJ会長、NHKOB)、武部俊一(JASTJ副会長、朝日新聞OB)、JASTJの会員、科学ジャーナリスト塾第1期～5期の塾生、学生のみなさん

科学ジャーナリストは何を伝えるのか、正確さに欠けるのではないのか、そもそもどんな資質の人たちなのか、これからの役割、責任は?科学カフェの雰囲気、ジャーナリスト以外の人でも自由に発言できる場を設定しました。日本科学技術ジャーナリスト会議(JASTJ)のメンバー、科学ジャーナリスト塾の塾生も参加します。

11月26日(日)

会場：日本科学未来館

A-2-3 “米村でんじろうサイエンスプロダクション”によるサイエンスショーとSqueak コンテスト

15:00-17:30 主催：HPスーパーサイエンスキッズ実行委員会

協賛：日本ヒューレット・パカード株式会社



米村でんじろうサイエンスプロダクションより、チャーリー西村さんを迎え、楽しく学べるサイエンスショーをHP SSK (<http://www.supersciencekids.com/>)がお送り致します。身近な物に隠れている科学の魅力を面白く不思議なショーを通して伝えます。ショーに続いて、魔法のソフトウェア“スクイク”の優秀 発表会があります。こちらも重ねてお楽しみください。



家族連れの方におすすめ



理科教育に興味がある人におすすめ



科学者・研究者と直接交流できるイベント



サイエンスコミュニケーションの現場に携わる人向け



大学生・大学院生・若手研究者におすすめ



最先端の科学を知ることができるイベント

B-2-1 シンポジウム「科学者と研究の倫理」

10:00-12:30

主催：サイエンスアゴラ2006プログラム委員会

登壇者：石黒彦彦(同志社大学)、笠木伸英(東京大学)、中村征樹(科学技術政策研究所)、白楽ロックビル(お茶の水女子大学)、村松秀(NHK)



近年、論文データの捏造・偽造など、科学研究に関する多くの問題が明るみに出ました。倫理綱領の策定や倫理教育プログラムの実施、告発に対する体制の整備など、さまざまな対策が始まりつつありますが、続発する問題の背景は根が深いものだと考えられます。対処療法的な対策にとどまることなく、研究の倫理をめぐる問題について包括的に議論する場を作ります。

B-2-2 展示・ワークショップ「科学コミュニケーター養成の多様性と共通性を考える」

10:00-16:00

10:00-12:00 ポスターセッション(東京国際交流館3F ホワイエ)「多様化する科学コミュニケーター養成活動を俯瞰する」

13:00-16:00 ワークショップ(日本科学未来館7F イノベーションホール)「科学コミュニケーターのための共通知識を整理する」



主催：日本科学未来館

登壇者：山科直子(日本科学未来館)ほか

社会全体の科学技術リテラシー向上には、特色ある科学コミュニケーション活動の積み重ねが不可欠だが、そこには共通の基礎知識が求められるのではないだろうか。科学コミュニケーター養成の取り組みが多様化する中、各機関の特徴を活かしつつ、機関や活動の枠を越えてすべての科学コミュニケーターが学べべき共通項を探る。

B-2-4 講演会「科学技術リテラシーの構築と21世紀のデザイン」

16:00-18:00

主催：21世紀の科学教育を創造する会

登壇者：北原和夫(国際基督教大学)

コーディネータ：高安礼士(千葉県総合教育センター)



理科離れの問題が大きく取り上げられている一方で、万民が共有すべき科学技術の知識、技量、考え方、すなわち、「科学技術リテラシー」とは何か、について、社会的合意が形成されているとはいえない。そのような「科学技術リテラシー」の構築は、実は我々の社会の将来像の構築と密接に関わっている、ということを描きたい。
・ワークショップ「21世紀型科学教育の創造4」プレイイベント / 幼児教育とサイエンスリテラシー、科学系博物館とサイエンスリテラシー、学校教育とサイエンスリテラシー、暮らし(健康・食品)とサイエンスリテラシー、ジャーナリズムとサイエンスリテラシーを考える。

G 新エンタテインメント体験

10:00-17:00

「Dive into the movie～新しいエンタテインメントへのアプローチ～」

主催：早稲田大学



「来場者自らが映画のキャストとして出演し、その演技を観る」という今までに無かった全く新しいエンタテインメントの形を実現します。Future Cast Systemは、それを可能にしたシステムで、この技術は、2005年「愛・地球博」で実装され、163万人が体感しました。この新しいエンタテインメントの息吹を感じ取ってください。

L-2-4 細胞を創る?! 先端バイオの現場から

16:00-18:00

登壇者：岩崎秀雄(早稲田大学)、上田泰己(理化学研究所)、加藤和人(京都大学)、木賀大介(東京工業大学)、林真理(工学院大学)



構成生物学の分野では、生命の基本単位である「細胞」を、生体高分子を組み合わせて再構成できるか、議論が始まっています。一体、どんな細胞を創ろうとしているのでしょうか?そんなものを作っても大丈夫なのでしょうか?新進気鋭の生命学者が、研究の魅力や課題について語ります。ぜひ疑問や意見をぶつけてみてください。

N 「産総研サイエンススクエア臨海(展示コーナー)特別公開」

11:00-16:00

産業技術総合研究所1Fの展示場を特別公開します。また、それに併せて、持丸正明氏(デジタルヒューマン研究センター副研究センター長)による講演と実演を行います。講演タイトル「自分の足サイズとかたちを正しく知るーデジタルヒューマンの世界」



11月27日(月)

会場：日本科学未来館

A-3-2 総括基調講演・総括シンポジウム

14:00-17:00

「広場からの発信ー日本のサイエンスコミュニケーションの未来に向けて」

主催：サイエンスアゴラ2006プログラム委員会

基調講演：黒田玲子(東京大学大学院教授・総合科学技術会議議長)

シンポジウム登壇者：有本建男(JST)、瓜谷輝之(日本HP)、小出五郎(科学技術ジャーナリスト会議)、小林信一(筑波大学)、美馬のゆり(はこだて未来大学)ほか

「科学と社会をつなぐ広場をつくる」をテーマに掲げたサイエンスアゴラ2006の総括として、3日間のセッションで話し合われたことのまとめを行います。イベント全体から、現状の日本の科学コミュニティにおける対話の課題を浮き彫りにし、これからのサイエンスコミュニケーションの未来像を描きます。

B-3-1 科学技術広報とは何か——それは、だれが、どこへ向かって、何を伝えるのか

10:30-12:30

登壇者：田柳恵美子(Sync Lab主宰)、中島秀之(はこだて未来大学学長)、中野栄子(日経BP社バイオセンター)



科学技術／研究開発広報とはいかなるものか、その現場(業界)ではどのようなことが行われているのか。異なる立場から科学技術／研究開発広報に直接・間接に関わってきたバネラの方々にその実態を紹介して頂きながら、そこに感じられる問題点、求められるコミュニケーションスキル、科学技術広報活動の社会的意義などについて議論する。

G 新エンタテインメント体験

10:00-14:00

「Dive into the movie～新しいエンタテインメントへのアプローチ～」

主催：早稲田大学



「来場者自らが映画のキャストとして出演し、その演技を観る」という今までに無かった全く新しいエンタテインメントの形を実現します。Future Cast Systemは、それを可能にしたシステムで、この技術は、2005年「愛・地球博」で実装され、163万人が体感しました。この新しいエンタテインメントの息吹を感じ取ってください。

D-3-1 報告会「科学技術ジャーナリズムの現場をたずねて」

10:30-12:00

主催：早稲田大学科学技術ジャーナリスト養成プログラム



早稲田大学「科学技術ジャーナリスト養成プログラム」(MAJESTy)では、現場主義をモットーに、院生たちが各地の科学技術報道の現場を体験してきました。日本の科学技術ジャーナリズムの現場で起きていることをジャーナリストの卵たちがレポートします。

11月25日(土)

会場:東京国際交流館

E-1-2 講演とショー リチャード・ワイズマン博士講演会「Mind Magic」

13:00-15:00 主催:サイエンスアゴラ2006プログラム委員会、プリティッシュカウンスル



英国ハートフォードシャー大学のワイズマン教授による、ショーを交えた講演です。心理学を応用した手品などを織り込んだ、洗練されたステージになります。ワイズマン教授は、サイエンスコミュニケーションの専門家として研究・教育にあたり、多くのTV番組に出演、ブロードウェイでの舞台の制作など幅広い活動で知られています。(同時通訳有り) *マイケル・ホワイト氏(英国プリティッシュカウンスル)の参加も決定しました。

F-1-1 広がる草の根サイエンスコミュニケーション—NPO、ボランティア活動の現場から

10:00-15:00 主催: NPO法人 サイコムジャパン
登壇者: 天元志保(NPO キャリア教育研究会)ほか



サイエンスコミュニケーション活動を実践しているグループ、個人の皆様のための、活動アピールの場です。法人、任意団体、ボランティア、個人など資格は問いません。NPOや団体の運営のコツを伝える講座も開催します。サイエンスコミュニケーション活動を始めたいとお思いの方々、自分たちの活動をアピールしてみたいとお考えの方々、御参加をお待ちしています。

G 展示「サイエンスコミュニケーションのさまざまな試み」

25・26日 主催:サイエンスアゴラ2006プログラム委員会ほか

10:00-17:00



ブース出展: 日本学生科学賞、ジャパン・サイエンス&エンジニアリング・チャレンジ、理化学研究所、産業技術総合研究所、海洋研究開発機構、日本宇宙フォーラム
ワークショップ: 「理研究 手作りプラネタリウムキット」(12:00-13:00)
ポスター出展: サイエンスカフェ関係者(10:00-11:30セッション)、各NPO団体、宇宙の日記念行事
日本各地で行われている、サイエンスコミュニケーションの多様な試みを、ポスターや展示で紹介。各地のサイエンスカフェの取り組みや、コミュニケーター養成のカリキュラム、NPOや企業の活動や、アートなど他領域との融合的な試みについても取り上げていきます。

H-1-1 報告会「科学リテラシー育成の試みをつなぐ～学校、企業、NPOの「科学教室」の実践から」

10:30-14:30 主催: NPO法人 市民科学研究室



参加者: 子ども科学実験教室など(アジレントテクノロジー)、わくわく科学教室(オリンパス)、分解ワークショップなど(ソニー)、
教育ルネサンス ことばの教室(読売新聞)、リコーキッズワークショップ(リコー)NPO地域パートナーシップ支援センター、NPO市民科学研究室
企業やNPOが運営する科学実験教室や、地域の特性を生かした体験型授業などが注目されている。学校との従来の枠にとらわれない連携により、様々な専門知を科学リテラシー育成に活用しようとする試みであり、科学コミュニケーターの活動の場としても、「地域/生活/環境」を主眼にした理科教育としても、新しい可能性を投げかけている。独自の取り組みで知られる団体が集い、その経験やノウハウを語り合い、今後を展望する。

I-1-1 キャリアセミナー「バイオコミュニケーターの必要性和社会での活躍」

10:00-12:00 主催: 株式会社リバネス



登壇者: 丸幸弘(リバネス)、黒澤真理(カルピス)、木村仁美(三菱商事)、西田淳子(アビーム・コンサルティング)、尾花大輔(リクルート)、ほか
現在、サイエンスコミュニケーターに興味を持つ学生・若手研究者の数は増加していますが、一方で明確なキャリアパスが存在しないのも事実です。そこで、バイオテクノロジーを分かりやすく伝える事のできる人材(バイオコミュニケーター™)の育成を行うリバネスが、その社会的意義を紹介し、卒業生がその後企業でどのように活躍しているかを紹介します。

I-1-2 サイエンス・ブレインストーミング「脳科学と神経神話～科学と社会の健全な関係を探る～」

13:00-15:00 主催: 脳を活かす研究会(「脳と社会」分科会)



登壇者: 青野由利(毎日新聞社)、今泉柔剛(文部科学省)、金子武嗣(京都大学)、兼子将敏(NHK)、川端裕人(フリージャーナリスト)、坂井克之(東京大学)、
長谷川一(明治学院大学)、松村京子(兵庫教育大学)、入来篤史(理化学研究所)、北澤茂(順天堂大学)、佐倉統(東京大学)、本田学(国立精神・神経センター)
脳科学は近年爆発的發展を見ている。その一方で、科学的根拠の曖昧な怪しげな「神経神話」が発生し、悪影響が懸念される。脳科学と社会との健全な信頼関係を築くには何が必要か? 研究、報道、教育、行政など、幅広い分野の参加者による市民会議的座談会。

J-1-1 サイエンスコミュニケーション活動報告会「なぜ科学を伝えるの?」

10:30-12:30 主催: サイエンスコミュニケーション若手の会



登壇者: 永野惇(井戸端サイエンス工房)、瀬戸文美(サイエンスエンジェル)、山崎敦子(サイエンステクノ)、大谷陽祐(NPOサイエンスステーション)、竹沢悠典(ほか)
オーガナイザー: 竹沢悠典(東大科学技術インタープリター養成プログラム)
近年、学生によるサイエンスコミュニケーション(SC)活動が活発である。しかし団体間の連携や経験の蓄積はまだなされていない。そこで本ワークショップでは、SC活動を実践している学生団体を集め活動報告をおこない、学生によるSC活動の意義や実践方法について議論する。

J-1-2 海外の若手研究者から話を聞こう!『JSPS サイエンス・ダイアログ』

13:00-15:00 主催: 独立行政法人 日本学術振興会



“サイエンスコミュニケーションをインターナショナルに!”というJSPSサイエンス・ダイアログ。このプログラムでは、海外の若手研究者が日本の高校等で講義を行っています。本セッションでは、実際にこのプログラムに参加した海外の研究者と協力者、高校の先生を交え、インターナショナルな視点から、サイエンスコミュニケーションについて意見交換を行います。



家族連れの方におすすめ



理科教育に興味がある人におすすめ



科学者・研究者と直接交流できるイベント



サイエンスコミュニケーションの現場に携わる人向け



大学生・大学院生・若手研究者におすすめ



最先端の科学を知る事ができるイベント

K-1-2 理系人材のための就職イベント「Career Discovery」

13:00-17:00 参加企業：清水国際特許事務所、株式会社スタッフジャパン、株式会社ネオ・モルガン研究所、他1社



理系人材のための就職イベント「Career Discovery」では、研究経験とコミュニケーションスキルを重要視するバイオ関連企業と若手理系人材のマッチングイベントを行います。4社のバイオ関連企業を集め、講演、パネルディスカッション、個別ブース形式という3部制でのマッチングを行います。定員40名、事前予約制となっております。

M

スペースダンス・イン・ザ・チューブ「チューブ体験により新しい科学的センスを育てる」

10:00-18:00 主催：未来身体ラボ

トークショー登壇者：アニール・セルカン(東京大学)、松本信二(CSPジャパン)、福原哲郎(舞踏家)



「スペースダンス・イン・ザ・チューブ」は、身体と空間に対するこれまでにない斬新な発想に基づく参加体験型展示です。忘れていた身体感覚を回復させ、空間を自覚し表現するチューブ体験は、情報社会・高齢社会・宇宙時代における科学技術リテラシー育成やアート&デザインにとって最適であると考えられ、新しい科学的センスを養うことができます。

11月26日(日)

会場：東京国際交流館

E-2-1 国立天文台講演会「冥王星が教えてくれた新しい太陽系の姿～惑星定義のすべてを語る～」

10:00-12:30 主催：自然科学研究機構 国立天文台

登壇者：観山正見、渡部潤一、小久保英一郎ほか



2006年8月24日、国際天文学連合総会において、太陽系惑星の定義が確定しました。水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星は惑星(planet)とし、冥王星および同種の天体はdwarf planetとした今回の歴史的決議の真相にせまります。



E-2-2 シンポジウム「競争的研究資金をより良く活用するために」

13:15-16:15 企画・司会：鳥井弘之(東京工業大学)

登壇者：大森慎吾(情報通信研究機構)、宮田清蔵(新工エネルギー産業技術総合開発機構)、伊賀健一(日本学術振興会)、

小間篤(科学技術振興機構)、西尾茂文(東京大学)、下河邊明(東京工業大学)、滝順一(日本経済新聞)



増額し続けてきた日本の科学技術における競争的研究資金。不正使用の相次ぐ発覚もあり、現状において多くの問題点が指摘されています。研究者とファンディングエージェンシーとの間の複層的な対話を通じて、課題を認識し、使う側にとってもファンディングする側にとっても、いかにより良い制度を作っていくかについて議論します。

E-2-4 シンポジウム「SFによる科学コミュニケーション『日本沈没』を題材に」

17:00-19:00 主催：日本学術会議 科学と社会委員会 科学力増進分科会

登壇者：小松左京(作家)、元村有希子(毎日新聞)、平朝彦(海洋研究開発機構)、毛利衛(日本科学未来館)、鈴木晶子(京都大学)



科学の情報は、新聞、雑誌、テレビの報道だけではなく、映画や小説などさまざまなメディアを通して、人々に伝達されています。科学コミュニケーションにおけるメディアの役割、メディアを通して伝え得る科学の可能性などについて、本年リメイクされた映画「日本沈没」題材に議論します。

F-2-1 理科実験ショー「石って面白い」

10:30-11:45 出演：境智洋(北海道立理科教育センター地学研究室・研究員)



“なまらしぶい”理科実験ショーで、子どもたちを“石”のとりこにしてしまう鉄人サカイ氏(サイエンスフォーラム2006)科学の鉄人2年連続最優秀賞他、多数受賞の実演とトークセッションです。見た後にはそこらじゅうの“石”が気になってしょうがないという教育効果を体験してみてください。

●プログラム 理科実験ショー(30分) 理科実験のすすめトークセッション(45分)

F-2-2 Putting the 'WOW' Factor in Science Communication サイエンス・コミュニケーションに驚きの要素を入れよう

13:00-15:00 登壇者：Dr. Richard Wiseman



In this unique event, Prof Richard Wiseman describes some of his more unusual headline-grabbing science communication activities, including mass experiments involving thousands of people, ghost-hunting, and seeing if a four year old child can predict the stock market. 本ワークショップは英語での実施を予定しています。

F-2-4 ワークショップ「研究のより良いウェブ情報発信に向けて」

17:00-19:00 主催：サイエンスアゴラ2006プログラム委員会

登壇者：岡本真(Academic Resource Guide(ARG)編集長)・ジャパンファウンデーション(国際交流基金)プログチーム



研究者個人、研究室、研究機関、科学館など、科学研究に関するウェブによる情報発信は、様々なレベルで行われています。しかし、ウェブの特性を活かしきれていない、既存の資源を有効に利用できていない、など、現状における課題は多くあります。それらの実践的な解決方法などを、ケーススタディを用い、参加者とのディスカッションも交えながら議論していきます。

H-2-1 B-Lab(ビーラボ)出前講習～新素粒子を探して下さい!～

10:00-12:00 主催：奈良女子大学

企画：多摩六都科学館、高エネルギー加速器研究機構、奈良女子大学



参加対象：高校教員を主対象とする(高校生以上の一般も参加可能)

B-Lab(新素粒子探索プログラム)をご存知ですか? つくばにある高エネルギー加速器研究機構で行なわれている宇宙の謎に迫る素粒子実験Belleグループが提供する、先端科学研究の一端に触れる高校生向けのプログラムです。この企画は、そのプログラムの魅力を紹介し、高校生に参加を呼びかける、現場で活動する研究者からの出前講習です。



家族連れの方におすすめ



理科教育に興味がある人におすすめ



科学者・研究者と直接交流できるイベント



サイエンスコミュニケーションの現場に携わる人向け



大学生・大学院生・若手研究者におすすめ



最先端の科学を知る事ができるイベント

H-2-4 ワークショップ「本音で語る研究倫理問題」

16:30-18:30

主催：NPO法人 サイコムジャパン

登壇者：大須賀壮(理化学研究所)、中島達雄(読売新聞)、中村直樹(科学新聞社)



近年研究成果の捏造や研究費の不正使用が大きな問題となっており、科学者への不信が高まっている。しかし、この問題に対する科学者たちの意見を聞くことは少ない。そこで本セッションでは、匿名性などに配慮しつつ、誰でも自由にこの問題に意見を言える場を提供し、21世紀の科学者像についてさぐる機会としたい。

I-2-1 ワークショップ「海の科学教育プログラムMAREと子供達に伝えるための科学コミュニケーション」

10:30-12:30

主催：NPO法人 海の自然史研究所、ジャパンMAREセンター

カリフォルニア大学バークレー校のローレンス科学教育研究所が開発しているMARE(マール)プログラムを実際に体験してもらうとともに、科学コミュニケーションツールとしてのMAREの活用例を紹介する。また、大学生・大学院生を科学コミュニケーターとして養成する取り組みと、重要な手段である科学教育プログラムのあり方を考える。



I-2-3 「若手理系人のためのキャリアセミナー」

14:00-18:00

主催：NPO法人 サイコムジャパン

登壇者：榎一平太(食品総合研究所)、沖本優子(みずほ証券株式会社)、山本伸(工学博士)、堂口達大(キャプラン株式会社)



若手研究者や大学院生の方々を対象にキャリアアップ、キャリアチェンジに成功した若手の方の成功体験を聞いたり、キャリアアップ、チェンジを行う上で必要なスキルをワークショップで体験できる場をご提供します。

J-2-1 ワークショップ「参加型科学コミュニケーションの多様性」

10:00-12:00

主催：大阪大学コミュニケーションデザイン・センター(CSCD)

登壇者：高橋祐一郎(農林水産政策研究所)、小林傳司(大阪大学)、八木絵香(大阪大学)



科学コミュニケーションの際に、一方向的に情報を伝えるだけではなく、人々をいかに巻き込み、時には研究活動に参加してもらうかを考えようという議論が提起されるようになってきました。欧米では方法論の開発も盛んですが、日本では実践例は限られています。そうした実践例の紹介と共に、今後日本社会であるべき参加型科学コミュニケーションについて議論します。

J-2-2 ワークショップ「科学技術コミュニケーションにおける市民メディア・ポッドキャストの可能性」

13:00-16:00

主催：北海道大学科学技術コミュニケーター養成ユニット(CoSTEP)

登壇者：中西真之(くわらじ)、大日方直樹(アストロアーツ)、清水院(OurPlanet-TV)、早川信夫(NHK解説委員)、隈本邦彦(北大CoSTEP)



いわゆる市民メディアと呼ばれるコミュニティFM放送、ケーブルテレビや、ポッドキャスト(インターネット放送)を活用して、各地で科学技術コミュニケーションの実践をしている関係者が集まり、既存の大手マスメディアとは一線を画するこうしたメディアが科学コミュニケーションツールとして今後どれほどの可能性があるかについて討論する。

J-2-4 ワークショップ「日本におけるサイエンスショップの可能性」

16:30-18:30

主催：大阪大学コミュニケーションデザイン・センター(CSCD)、NPO法人市民科学研究室

登壇者：上田昌文(市民科学研究室)、渡部麻衣子(市民科学研究室)、中川智絵(大阪大学)、横川可奈子(大阪大学)、春日匠(大阪大学)



欧米で、大学が市民の要求に応じて研究を受託するサイエンスショップなどCBR(コミュニティ・ベースド・リサーチ)と呼ばれる手法が注目されています。研究が非営利の資金で行われ成果が広く公開される、新しい形です。大学と社会の関係の見直しが叫ばれる中、日本でも同様の機関が機能するかどうか、この問題に取り組むNGO関係者などもお招きして議論します。

K-2-1 ワークショップ「サイエンスグッズ・ワークショップ」

10:00-12:30

主催：天文学とプラネタリウム

登壇者：上田壮一(Think the Earth)、山下治子(月刊「ミュゼ」編集長)、岡山悠子(科博SC講座卒業生)、高梨直紘(天プラ)ほか



街中の雑貨店、ミュージアムショップなどで目にする様々な“科学系グッズ”。本WSでは、この“科学系グッズ”の存在について考え、議論し、新たな可能性を追求する場を提供する。たかがグッズ、されどグッズ。“科学系グッズ”の持つ魅力に、皆で囚われたい。

K-2-2 ワークショップ「かがくナビ・ワークショップ」

13:30-15:30

主催：独立行政法人 科学技術振興機構

登壇者：古田豊(立教新座中学・高校)、藤村研究室(鳴門教育大学)ほか



中学生向け科学系ウェブサイト「かがくナビ」のデモ版を初公開します。当日会場では、ちいさな実験で大きなオドロキに出会える「理科準備室へようこそ」、会場周辺を探検して身近な未知(かもしれない?)を探した「大発見?かもね!」、1枚の写真から疑問を3つは引き出す「トリプルはてな」のワークショップを行います。

K-2-4 ワークショップ「科学の「わかりやすさ」の危うさ・大切さ—科学コミュニケーターによるオリジナリティの磨き方」

16:30-18:30

主催：富山大学人間発達科学部科学技術社会コミュニケーション研究室

登壇者：高橋真理子(山梨県立科学館)、まつばらけい(ライター、子宮・卵巣がんのサポートグループあいあい)、棚座圭太郎(富山大学)、林衛(富山大学)



科学コミュニケーターの役割は、科学の成果の紹介に留まらない。分野や利害の壁をまたぎ超え、事実と事実、人と人を結びつけながら、オリジナルなストーリー、隠された真実を表現していく。そんな事例から最も大切な役割が再確認できる。心惹かれる切り口や問題設定さえあれば、内容が高度であっても、むずかしさによるコミュニケーションの遮断は生じない。

M

スペースダンス・イン・ザ・チューブ『チューブ体験により新しい科学的センスを育てる』

10:00-18:00

主催：未来身体ラボ

トークショー登壇者：高柳雄一(多摩六都科学館館長)、渡辺政隆(科学技術政策研究所)、福原哲郎(舞踏家)



『スペースダンス・イン・ザ・チューブ』は、身体と空間に対するこれまでにない斬新な発想に基づく参加体験型展示です。忘れていた身体感覚を回復させ、空間を自覚し表現するチューブ体験は、情報社会・高齢社会・宇宙時代における科学技術リテラシー育成やアート&デザインにとって最適であると考えられ、新しい科学的センスを養うことができます。

サイエンスアゴラ2006を終えて

プログラム委員 美馬のゆり

日本においても科学コミュニケーション活動の必要性が広く認識されてきています。多くの方々のご協力があり、サイエンスアゴラ2006はそれを象徴するようなイベントとなりました。

サイエンスアゴラ2006は、科学コミュニケーションのイベント開催だけが目的ではありませんでした。サイエンスアゴラという科学コミュニケーションの人的・物理的ネットワークを立ち上げるきっかけとするためのものです。

科学コミュニケーションを促進していくために必要なこととして、

1) 科学コミュニケーション実践の「場」の構築

2) 科学コミュニケーションの促進に資する人材の育成

が考えられます。これを実現するためにサイエンスアゴラがあります。今後ネットワークを活性化する触媒となる人や仕組みをどのように作っていくか。広場としての活動を広く、定常的なものにしていくには、科学コミュニケーション協議会、コンソーシアムのようなコミュニティの構築が鍵だと考えます。

サイエンスアゴラは、科学コミュニケーションを促進する広場であり、みんなで育てていくネットワークです。日本の未来のために、みんなの未来のために、今後も多くの方々の協力を得て一緒に作っていきたくと思っています。どうぞよろしくご協力をお願いします。

イベントを終えて、今後に向けて

サイエンスアゴラ2006事務局 長神風二

サイエンスアゴラ2006は、「サイエンスが社会と交流し対話」し、「サイエンスを担う多様な人々間の対話を促し」、「日本中のサイエンスコミュニケーター達が集い議論する」広場となる、と、3つの目標を標榜しました。1500人以上の参加者と、多くの団体・個人の皆様の参画を得て、3つそれぞれについて、一定の達成を得ることができました。反省の大きな部分には、この3つを同時に掲げることの意義を作り出せたか、ということにあると考えています。アンケート等に散見される厳しい指摘の原因にもなっています。今後につなげていくためには、より深い思慮と周到さ、力の結集が必要になってきます。

この度の開催に御尽力頂いた全ての方々へ深く感謝すると共に、その後へも変わらぬ御支援をお願い申し上げます。社会と、科学と、そしてそこにあるコミュニケーションのために。



科学と社会をつなぐ広場をつくる

science agora 2006



新エンタテインメント体験「Dive into the movie～新しいエンタテインメントへのアプローチ」の様子



キャリアセミナー「バイオコミュニケーターの必要性と社会での活躍」



研究機関等によるブース出展も行われた



報告会「科学技術ジャーナリズムの現場をたずねて」から



ワークショップ「海の科学教育プログラムMAREと子供達に伝えるための科学コミュニケーション」



「サイエンスグッズ・ワークショップ」の様子



science agora
2006

科学と社会をつなぐ広場をつくる